

## 地域おこし協力隊通信(No.47) なかたねの生き物を見て思う(知史)

町内を歩き回る野良猫に首輪型のカメラを付けて、どこを歩いているのか見てみたい。ヒトの足首くらいの高さから見るとなかなたねはどうだろう。ふらふら覗き込んだ海にはガラス玉みたいなブルーの眼が映って、その視線の先に魚が捉えられているかもしれない。

キジの目線で畑を歩きたい。土に嘴を突っ込んで、植物の球根を引っ張り出すのは迫力がありそうだ。次の畑まで道路を渡るとき、増田から県道75号線を北上する車にぶつかられそうになる。でも飛ばない。ドタドタと早歩きをして避けて、また土を突つつく。

ツマベニチョウの背に乗って山を一気に下りたい。他の蝶よりずっと速いのが自慢で、得意げに滑空する速度に身を任せる。気づいたら屋久津海岸の砂地まで来てしまって、止まり木がなくて慌てるかもしれない。下ってきた時よりずっと遅い速度で、千鳥足さながらえいやいやと上っていく。ギョボクの木は減っていて、チョウの姿も見えないようになってしまった。小学生の頃の純粋な心で種子島を見てみたい。ここにしかない海の青さに両目を大きく見開いて、思いっきり遊びたい。時に、少し悪ぶった年上の友だちと一緒に堤防から飛び込みをした。友だちみたいに前方宙返りの飛び込みはできないけど、鼻をつまんで真っ直ぐに落ちて、一気に脳天までずぶ濡れになりたい。去年より高いところから飛び降りれるようになったことを、大人の仲間入りをしたみたいに喜ぶたい。いつまでもいつまでも、移住してきた時の新鮮な気持ちで種子島を好きでいたい。この慣れてしまった感覚が悔しい。だから毎日全力で生きて、必要以上に喜怒哀楽に心を突き動かされながら、せわしなく日々を過ごしたい。

湯目知史(ゆのめともふみ) | 中種子町地域おこし協力隊員。宮城県出身の作家・ライター。種子島の美しい瞬間を文字にして伝える。『ゆのめともふみ』で検索すると、noteというブログのようなものが拙作がご覧になれます。

2020年10月号より、町の皆さんからよくいただく『地域おこし協力隊制度』や私達についての質問を、毎月少しずつ紹介しています!

### 【第3回】ふたりは、なんで『地域おこし協力隊』になったの?



住み慣れた住まい・仕事・家族・友人関係を置いてまで中種子町に来るのは、不安じゃなかった?

とっても不安だよ。協力隊制度と、中種子町とのご縁もあり、地域活性化に関わる夢を叶えるために思い切ってきたんだ。



中種子町でどんな仕事をしたいの?

約1年いろんな人のお話を聞いて、『みんながチャレンジしやすい町』になるお手伝いをしたいと思っているよ。

#### 地域おこし協力隊制度で移住した理由

- ① 起業して定住することを前提とした制度であること
- ② 活動を通して地域の人柄や風土がわかること
- ③ 行政と住民、両者の声を聴けること

#### やりたいこと

ソフト面：共感型コミュニティによる話し合い場づくり  
 高校生の地域課題解決型プロジェクト支援 等

ハード面：空き施設を活用した拠点作り 等  
 (例) 旭町商店街の空き店舗を話し合いの拠点にチェンジ  
 海沿いの空き家をお試し移住の場にチェンジ

面接の時に初めて種子島・中種子町に来ただけだけど、人の温かさに触れて、中種子町とのご縁を大切にしたいと移住を決めたんだって。

島に出る前に、地域の子供たちに中種子町の魅力をもっと知ってもらい、戻りたくなるような、戻りやすいような場所にしたいですね。拠点が近いため役場周辺での活動が多く見えるかもしれませんが、声をかけてもらえればどこにだって私達は行きます!